

沖繩久高島における  
“シマ”の内部体系と神観念

吉 成 直 樹  
(人文学部・史学教室)

The System of the Village as a Microcosm in Kudaka  
Island, Okinawa

Naoki YOSHINARI  
Department of History Faculty of Humanity

I. はしがき

民俗学、社会人類学などの分野を中心に、これまで数多く積み重ねられてきた沖繩研究においては、沖繩の村落＝シマ<sup>1)</sup>が、社会的にも文化的にも、ひとつの閉じた体系、すなわち小宇宙としての内容を持ったものである、との認識がなされてきた。しかし、そうした認識を持ちながらも、では実際にシマとはどのような内容を持つ小宇宙なのか、という点に関しては、あまり目立った成果はなく、わずかに一連の民族学的研究<sup>2)</sup>において、沖繩の人々の抱いている神観念<sup>3)</sup>を体系化して捉える試みがなされているにすぎない<sup>4)</sup>。

このことは、みかたを換えて言えば、これまでの沖繩研究においては、その膨大な蓄積にもかかわらず、シマを全体として把握しようとする視点を持った村落研究がきわめて少なかったということの意味している。それは、沖繩研究がつねに民俗学主導のもとに展開され、シマそのものに対して関心があまり向けられなかったこと、また戦後導入された社会人類学の分野においても、シマを舞台にした実証的研究を行いながらも、シマを構成している諸側面—儀礼、祭祀組織、親族組織など—の個別的な分析に議論が偏りがちであったことと無縁ではない。

しかし、小川徹<sup>5)</sup>が指摘しているように、沖繩のシマは「社会基体の存在形態」なのであって、シマを基盤として、はじめて琉球的世界が開花するのである。したがって、シマを包括的に把握することは、沖繩の社会あるいは文化を的確に理解するためには欠かすことのできない課題である、と考えられる。

本稿は、以上の反省を踏まえて、シマの日常生活を構成しているいくつかの側面を、シマという枠のなかに体系づけ、統一的に把握しようとする試みである。その過程で、シマの小宇宙としての性格と、その内容の一端が明らかにされると考える。

シマをひとつの統一体として把握するための基軸を、ここでは神観念におく。沖繩のシマにおいては、神観念は単に祭祀世界の問題としてとどまるばかりではなく、日常生活のあらゆる側面に深く透徹し、それらを規定していると考えられるからである。

研究対象として選んだのは、沖繩本島の南東端から約 5Km の海上に横たわる久高（くだか）島である<sup>6)</sup>。

II. 久高島の概況

沖縄本島の南東海岸にある馬天港から約50分、わずか数トンの定期発動機船に揺られてゆくと、隆起珊瑚礁でできた細長く平坦な島<sup>7)</sup>、久高島にたどり着く(図1)。島の周囲は、アダンやクバの防風林に囲まれ、西海岸には急崖が長く続いている。

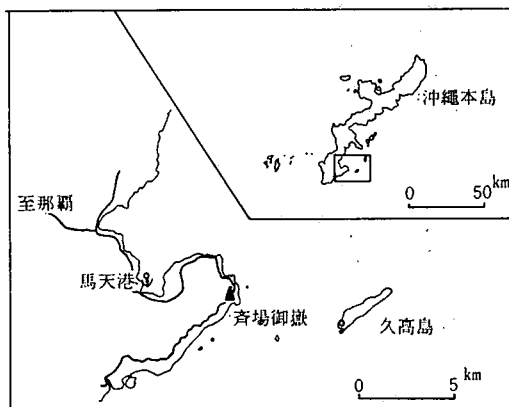


図1 久高島の位置

この島ただひとつの集落は、徳仁港に臨んで島の南西端に位置している(図2)。ほとんどの家には、珊瑚石灰岩を積み上げた石垣がめぐらされ、また屋敷内にはフクギなどの防風林が植えられている。

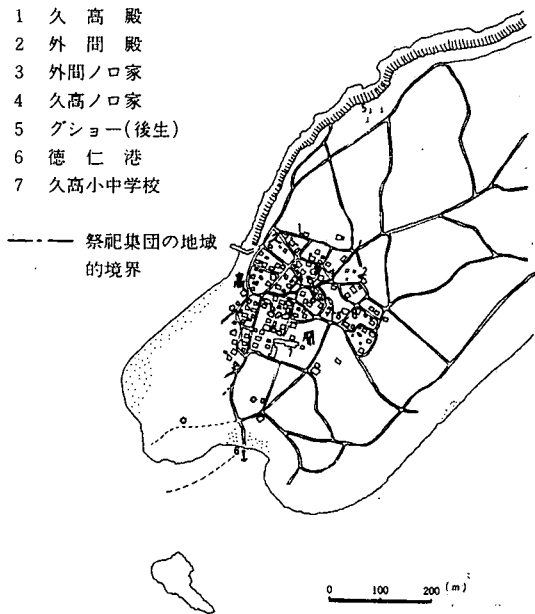


図2 久高島の集落

かつては、水に乏しく、飲料水用の共同井戸が集落の北西のはずれにひとつあるだけで、各家に備えつけられたコンクリートの桶に貯えられた天水の利用を余儀なくされていたが、1978年8月に、本島からのパイプラインによって水道が敷設されてからは、水不足の心配は解消された。

島での生活を支えているのは、主に漁業である。

島の男たちは、サバニ<sup>8)</sup>と呼ばれる杉製の小型板付船に乗り、イカ、カジキ、モズクなどの漁を行っている。かつては、南は八重山群島近海から、北は奄美諸島周辺にまで出漁していたが、現在では、サバニに動力が付けられるようになったにもかかわらず、活動範囲は久高島近海に狭まってきた。

一方、女たちは、島のあちこちに散在しているわずかな畑<sup>9)</sup>で、ダイコン、ニンジン、豆類、それに麦などの栽培をしているが、収穫のほとんどは自家消費用である。水利、土質の問題もあり、久高島では伝統的に稲作は行われていない。男たちは、農業には一切関与せず、自分の家に割り当てられている<sup>10)</sup>耕地がどこにあるのかさえ知らない場合が多い。この点、男女の性的分業は明瞭である。最近では、過疎化の影響もあり、至る所に放置されたままになっている畑がみられる<sup>11)</sup>。また、現金収入のなかでは、女たちの失業対策事業（廃油ボール拾い、道路補修）への依存度が高くなっている。

1978年12月現在、人口 353人（戸数 106戸）であり、1959年の人口 634人に比べると、281人の減少である。特に、20代、30代の人口減少は著しく、幼年人口の激減につながっている（図3）。これは、高校進学を機に島を離れた若者が島に戻ってこないことが大きな原因となっている。

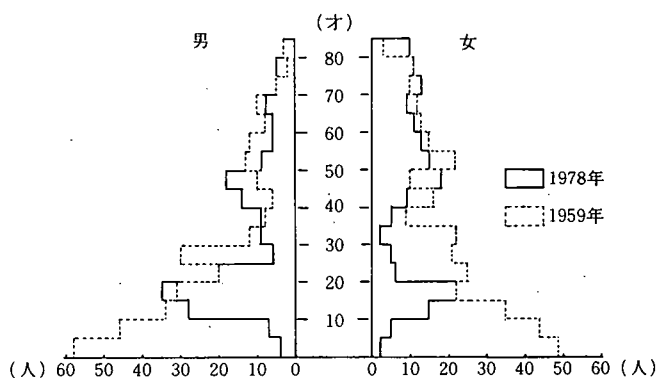


図3 久高島の人口構成比較  
——1959年と1978年——

久高島は、「神の島」と呼ばれ、琉球開闢あるいは琉球王朝にまつわる数多くの伝承や説話を持つばかりではなく、沖縄の他の島々にはみられない多くの儀礼を今日に残している。特に、12年ごとの午年に行われる「イザイホー<sup>12)</sup>」と呼ばれる儀礼は、古い沖縄の祭祀世界の一端を象徴的に表現したものであるとして、古くから民俗学をはじめとする多方面の研究者の関心を集めてきた<sup>13)</sup>。

### Ⅲ. 久高島の神観念

これまでの民族学的研究によれば、沖縄における神観念の体系は、おおまかに (a) 来訪神 (b) 滞在神 のふたつの体系に分けることができる、という<sup>14)</sup>。

## (a) 来訪神

沖縄に広く分布している仮面の行事<sup>15)</sup>に明瞭に表現されているように、沖縄には時を定めて訪れる来訪神の神観念が存在している。

仮面が象徴している神は、あの世の神であり、この神観念の体系を基礎づけているのは、「あの世とこの世の厳然たる区別<sup>16)</sup>」である。

あの世とは、ニライ（沖縄）であり、ネリヤ（奄美）である<sup>17)</sup>。ニライは、海底あるいは地底深くにある世界と観念されている場合もあるが、普通には海と空が接する水平線あたりの薄ぼんやりとしたあたりにある世界と観念されている。沖縄の人々にとって、ニライは人間に生命、農作物などをもたらす豊穡の世界であると同時に、一方では病などの禍をもたらす世界でもあり、相反する性格をあわせ持つアンビバレントの構造を持っている、という<sup>18)</sup>。

また、あの世から時を定めてこの世を訪れる仮面の神には、再生の思想が結びついており、「神が現れるたびにこの世は再生し、その起源にたちかえって新しくやり直す<sup>19)</sup>」のである。

仮面の行事を持つ地域だけにこの来訪神の神観念が存在するわけではなく、他の地域にも来訪神の存在を想定して行われている儀礼が数多くみられる。

## (b) 滞在神

沖縄の村落には、ウタキ（御嶽）と呼ばれる聖域がある。この聖地は、集落背後の、こんもりと木の生い繁った小さな森にあり、「村人の遠い祖先達の霊が宿っている、いわば古代の葬処<sup>20)</sup>」である、という。「古代の葬処」は、次第に神聖視されるようになり、シマ守りの神がいる聖域へと転化していった。

仲松は、この神の性格について次のように述べている。

「…村落民とは一体になっている神がいる。彼等村人と血のつながった歴史的祖霊神そのものであり、村人から見た場合は、すべてを投げ捨てて自分達を抱き育ててきた親々の昇華した神である<sup>21)</sup>」

このように、一年を通じてウタキにいる神が滞在神であり、時を定めて訪れる来訪神の神観念とは、明瞭に区別される。この体系においては、「あの世とこの世の区別がなく、世はひとつ、この村だけであり、…神のいないこの世というものは存在しない<sup>22)</sup>」のである。

ウタキは、古代の葬処であった、という性格上、ひとつの血縁集団（＝マキ）にひとつずつ存在する。したがって、かつてのマキが現在の村落にそのまま発展した村落では、ウタキはひとつであり、複数のマキの併合を経験した村落では、マキの数だけウタキがある、ということになる<sup>23)</sup>。

ところが、ウタキと称するものなかには、上述した性格の神観念と結びついているものばかりではなく、ニライから訪れる神、あるいはオボツ（天上の神の在所）から訪れる神の降臨の場としての性格を持っているウタキ、さらにはニライからの神が、次第にウタキに長くとどまるようになったという、来訪神の起源を持ちながら、それが滞在神化した神が宿るウタキ<sup>24)</sup>もある。

以上、沖縄に広くみられる神観念の体系について略述してきた。久高島の神観念は、さまざまな要素が錯綜し、複雑をきわめているが、やはりそのなかに来訪神と滞在神の体系を読み取ることができる。

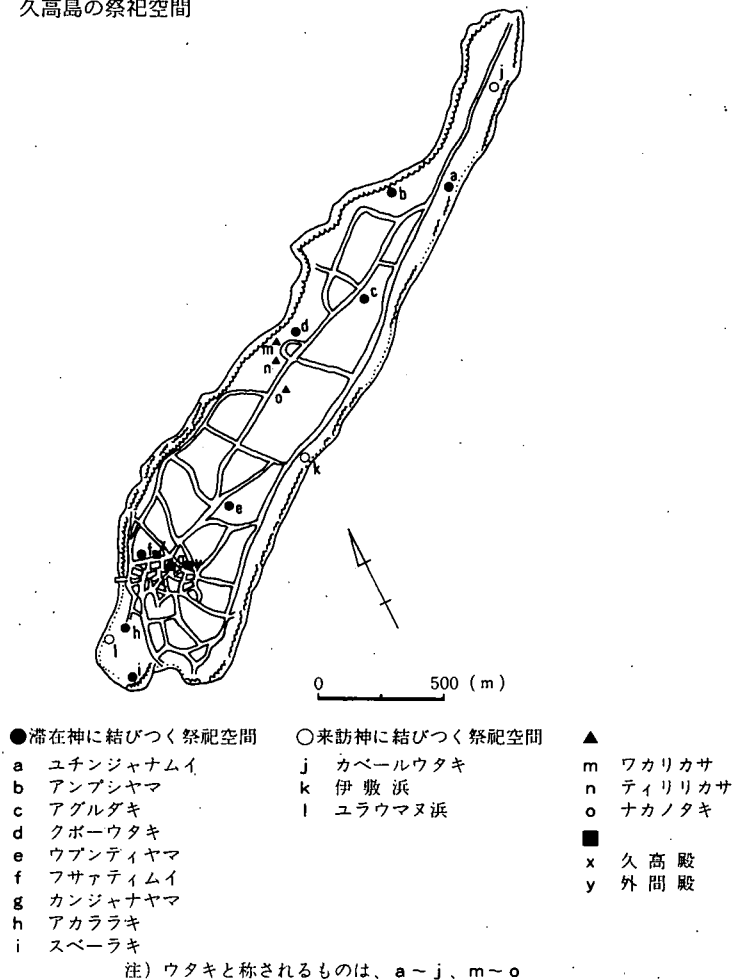
## (1) 久高島の祭祀空間

図4は、久高島における祭祀空間を図示したものである。

i) 滞在神に結びつく祭祀空間

さきに述べたように、滞在神は、ウタキに宿る祖先神であり、仲松の説に従えば、ウタキの数は、基本的に現村落を構成している血縁集団 (=マキ) の数を示している筈である。

図4 久高島の祭祀空間



ところが、久高島ではウタキと称されるものは、全部で13を数える。

拙稿において、現久高村落は、ふたつの村落が移動・併合して形成されたものであるとする仲松の見解<sup>25)</sup>に基づいて、かつての村落に結びつくウタキは、アグルダキとクボーウタキのふたつのウタキではないか、と仮説的に整理したことがある<sup>26)</sup>。「琉球国由来記」の記載、現在の祭祀集団などをみる限りでは、現集落がふたつのマキを基本にして形成されたことは間違いなく、古代の葬処としての性格を持つウタキは、このふたつのウタキあった可能性が高いと考えるが、現在の久高島祭祀においては、葬処であったかどうかは別にして、この他にも祖先神が宿るとされているウタキがあり、それらのウタキ群はマキ併合以降の新たな祭祀体系のなかで再編されていると考えられる<sup>27)</sup>。

久高島において、滞在神と関連のあるウタキは、クボーウタキ、アグルダキ、それにユチンジャナムイ<sup>28)</sup>、アンブシヤマ、ウブンディヤマ<sup>29)</sup>、カンジャナヤマ、フサティムイ、アカララキ<sup>30)</sup>、スペーラキの合計9つである。

久高島では、30才に達したすべての女性が12年ごとに行われるイザイホーと呼ばれる神事によっ

て、神女として承認されるのであるが、新たに神女となる者は、イザイホーに先立ち、自分の帰属するウタキが決められる。帰属するウタキは、前記9つのウタキのうちのいずれかであり、それらのウタキには、カミ化した彼女たちの祖先がいると認識されている。ウタキに帰属することによって、神女としての力が賦与されるのだという。

これら祖先神が滞在しているウタキのなかで最も重要な位置を占めているのは、クボーウタキであり、他のウタキが持っている機能を包含する機能を持っている<sup>31)</sup>。またクボーウタキは、帰属している神女の数が最も多いウタキであり、約80%の神女がこれに帰属している<sup>32)</sup>。

そのほかにウタキと呼ばれているものが4つある。

そのうち、ナカノタキは、クボーウタキに行く際に、あらかじめクボーウタキの祖先神にこれから祈願に行くことを告げる〈通うしウタキ〉であり、ウタキそのものはいかなる神観念とも無縁である。

カペールウタキは、〈竜宮〉からの神が、遙か東方から来訪し、降臨するウタキであるとされている。竜宮は、久高島でニライと区別されているが、いずれの神も東方遙か彼方から来訪するとされていること、また他地域では竜宮とニライは互いに置き換え可能な言葉であることから、ここでは一応竜宮をニライのカテゴリーに含めて議論を進めてゆく。

また、ワカリカサ、ティリリカサは、それぞれ首里、玉城という旧琉球王朝に関連する場所に向って遥拝する際に用いられるウタキであり、滞在神、来訪神いずれの神観念とも直接的な関連は見い出せない。

## ii) 来訪神に結びつく祭祀空間

ニライの世界が、海と空の接する水平線あたりにあることは、沖縄において広く認められるが、その方向となると、集落の立地する場所に応じて地域的にズレがある。久高島では遠い水平線の望める東方にニライの世界がある、と認識されている。

そのニライの世界に結びつく祭祀空間は、伊敷浜とさきに述べたカペールウタキである。

伊敷浜は、久高島の東海岸にあり、東方のニライに向って祈願が行われる祭祀場であるが、外間殿などに置かれている火の神（ヒヌカン）としての3個の石も、この伊敷浜から持ってきたものである。久高島では、文化要素のなかで最も重要な火もニライからもたらされた、と考えられている。

以上のほかに、久高島では、祭祀場の中心になる久高殿と外間殿があるが、特定の神観念とのみ関連しているとは考えられない。

## (2) 久高島の祭祀行事

現在久高島で行われている祭祀行事<sup>33)</sup>は、全部で37種あり、年中行事26種、12年ごとに行われる儀礼3種、通過儀礼4種、不定期危機の儀礼4種である。ここでは、年中行事について論じてゆくが、資料の制約上そのうちの18種について検討する<sup>34)</sup>。

久高島の年中行事においては、ひとつの行事のなかに滞在神、来訪神いずれの神観念も読み取ることができるなど、複雑な内容を持っている場合が多い。しかし、行事のなかで、どのような神観念が中心に据えられているかは、行事の名称、司祭者、形式、さらには行事の行われる祭祀場、行事のなかで唱われるウマイ、ティルル<sup>35)</sup>の内容を考慮することによって知ることができる。

表1は、久高島における年中行事の一覧表であり、そのなかに滞在神、来訪神のいずれのカテゴリーに分類できるかを示した。

（旧）月	行事名	司祭者	祭祀場	行事内容	滞在神	来訪神
1月	ピーマッティ	ノロ	クボーウタキ	火事・水難除け祈願	○	
	ソージマッティ	ノロ	外間殿・久高殿	麦の初穂 男子の健康祈願		○
2月	ニライウブヌシ ウガタテ	ノロ	伊敷浜	男子の海上安全と健康祈願		○
	ヒータチ	ソールイガナシー	カベールウタキ	大漁祈願		◎
3月	三月ウマチー	ノロ	外間殿・久高殿 クボーウタキ	麦の収穫 女子の健康祈願	○	○
	ハマシーグ	ノロ	ユラウマヌ浜	害虫払い		
4月	カンジャナシー	ノロ	外間殿	祓い済め		○
5月	マブッチマッティ	ノロ	外間殿・久高殿	粟の初穂 男子の健康祈願		○
6月	六月ウマチー	ノロ	外間殿・久高殿 クボーウタキ	粟の収穫 女子の健康祈願	○	○
7月	ウブマーミキ	ソールイガナシー	外間殿・久高殿	大漁祈願		◎
8月	ヨーカビー	ノロ	クボーウタキ	健康祈願	○	
	テラーガミ	根人	久高殿	祓い済め	太陽の神	
	十五夜	ノロ	外間殿	健康祈願	月の神	
9月	カンジャナシー	ノロ	外間殿	祓い済め		○
10月	マーミキグワ	ソールイガナシー	外間殿・久高殿	大漁祈願 ソールイガナシーの交替		◎
11月	フバワク	ノロ	各ウタキ	健康祈願	○	
12月	ピーマッティ	ノロ	クボーウタキ	1月ピーマッティの願解き	○	
	ニライウブヌシ ウガントキ	ノロ	伊敷浜	2月ニライウブヌシ ウガタテの願解き		○

注) 来訪神の◎は、竜宮。

表1 久高島の年中行事

分類の対象とした18の年中行事のうち、来訪神のカテゴリーに含まれるもの9、滞在神のカテゴリーに含まれるもの4、両方の神観念を並列させているもの2、保留1、どちらのカテゴリーにも含まれないもの2、である。

両方の神観念を並列させていると思われる儀礼は、オンナオガミの行事とされている三月ウマチーと六月ウマチーであり、外間殿、久高殿でのニライ遥拝という要素と、神女たちのクボーウタキでの祈願という要素をあわせ持つ。ニライ遥拝は、麦・粟の収穫に関連しクボーウタキでの祈願は女の健康祈願に関連している。したがって、これら2種の儀礼は、ニライ＝農耕儀礼、ウタキ＝女の健康祈願という異なる神観念に基づく儀礼を包含して構成されていると考えられる。（これに対して、オトコオガミとされる1月、3月のソージマッティとマブッチマッティはニライに対して、麦・粟の予祝と男の健康祈願を行うものである。）

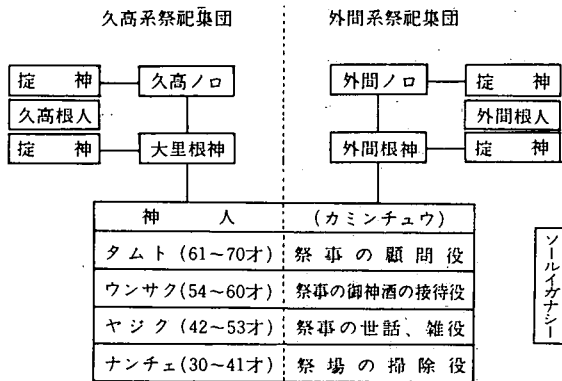
また、いずれの категорияにも含まれないのは、8月に久高殿で行われるテラーガミと外間殿で行われる十五夜であり、テラーガミは太陽の神、十五夜は月の神を対象とするものである、という。これらの神々が、来訪神、滞在神といかなる関係を持つものであるか不明である。ここでは、議論を進めてゆくために、一応捨象して考えてゆく。

保留としたのは、3月のハマシグと呼ばれる行事であるが、これとテラーガミ、十五夜を除いた年中行事の行事内容についてみると、それぞれの category に応じて、その内容に相違があることが分る。すなわち、来訪神の category に属するものは、農耕儀礼、漁撈儀礼など生産に関するものを中心としており<sup>37)</sup>、一方滞在神の category に属するものは、火事、水難などの防災に関する儀礼もみられるものの、健康祈願のための儀礼が多い。来訪神の category にも、健康祈願の行事がみられるが、それは男子の海上での安全と健康を祈願するという性格を持っている。また来訪神の category のうち、ニライは農耕儀礼に、竜宮は漁撈儀礼に結びつくという相違を認めることができる。

神観念の相違に基づいて、行事の内容が異なっているということを踏まえて、さきに保留にしておいたハマシグという行事を検討してみると、この行事は来訪神の category に属するものと推定される。この儀礼は、久高島の西海岸で行われ、しかも害虫払いという農耕にとってマイナスの価値が付与されている点を考えると、東=予祝あるいは収穫の感謝、という農耕にとってプラスの価値が付与されているニライの観念とは対極にあることが分かる。このことは、久高島においては、〈西〉／〈東〉に農耕にとっての〈-〉／〈+〉が対応していることを示すものであり、したがってこの儀礼はニライの延長線上にあるものと考えることができる。

ここでは、各行事について詳述はしなかったが、ごく大まかに言って、神観念の体系に応じて、来訪神=ニライ=生産に関する儀礼、滞在神=ウタキ=健康祈願のための儀礼という、ふたつの複合があると考えることができる。

(3) 久高島の祭祀集団



注)・掟神は、ノロ、根神の先導役。  
 ・根人は、男性神役者。  
 ・ソールイガナシーは、竜宮の神を司る男性神役者。外間・久高の2名。

図5 久高島の祭祀集団

久高島の祭祀行事は、滞在神、来訪神いずれの category に属する場合にも、図5に示した祭祀集団によって行われる。

この祭祀集団の特徴を簡単に要約すると次のようになる。



- (a) 30才から70才までの島内の全女性によって構成されている。
- (b) 祭祀集団の頂点に立つ外間ノロ、久高ノロのほか、根神、根人、掟神は世襲である。
- (c) タムト以下の組織は、年齢階梯的なシステムであり、階梯に応じて職責が割り合てられる。
- (d) 外間系祭祀集団と久高系祭祀集団のふたつに内分化しているのは、ふたつの血縁集団（＝マキ）が併合して成立したことに基づく<sup>38)</sup>。

これまでの社会人類学的研究の成果<sup>39)</sup>によれば、滞在神信仰は、「血縁関係に基づく集団」によって支えられ、また来訪神信仰は、「年齢的、世代的に序列化した集団」によって支えられているという。

この見解に基づいて、久高島の祭祀集団を検討してみると、一見一元的に構成されているかにみえるこの祭祀集団は、そのなかに血縁関係に基づく原理と、年齢階梯的な原理というふたつの異なる原理を包摂していることを把握できる。

祭祀集団の加入礼であるイザイホーに先立ち、神女たちは、ある一定の方式に従って帰属するウタキがきめられる。この帰属方式は、長女は父方の祖母、次女は母方の祖母の帰属しているウタキ、三女以下は任意<sup>40)</sup>のウタキに帰属するというものであり、血縁的な関係による帰属が基本に据えられている。

帰属するウタキが決まると同時に、彼女たちは、祖母が祀っているトゥパシラと呼ばれる香炉の灰を分けてもらい、自分の家に祀る。この香炉は、家の一番座と呼ばれる部屋の東南の隅に置かれ、神女たちが毎月の1日と15日に線香を焚き、家族の健康と家内の安全を祈願する。この香炉には、ウプティシジという祖先の霊が宿り、彼女たちに家を守る力を与えるのだ、という。

このように、久高島の祭祀集団は、血縁的な関係に基づいて、特定のウタキに帰属すると同時に、ウプティシジを継承し、神女としての資格を得た女性によって構成されている。

久高島の場合、神女たちの帰属するウタキは、全部で9つあり、他地域の例にみられるように、個々のウタキごとに個別の祭祀集団が形成されているわけではないが、それぞれのウタキに帰属する神女たちが、ひとつの祭祀集団に包含され、村落レベルの祭祀行事を担っているのである。

これに対して、祭祀集団に加入できるのは30才に達した女性であること、さらに祭祀集団に加入すると年齢に応じて<sup>41)</sup>、ナンチュ（30～41才）、ヤジク（42～53才）、ウンサク（54～60才）、タムト（61～70才）と順次地位が上昇し、職責が変わってゆくことなどに、この祭祀集団の持つ年齢階梯的な原理を容易によみとることができる。

これまでの社会人類学の成果と、本章(1)、(2)で論じた内容を踏まえれば、血縁関係に基づく原理は滞在神に、年齢階梯的な原理は来訪神に結びついている、と考えることができる。したがって、現在の久高島の祭祀集団は、滞在神信仰を支える血縁関係に基づく祭祀集団と、来訪神信仰を支える年齢的に序列化された祭祀集団というふたつの意味を持つ、二重の構造をとっているのではないか。

さらに注目すべきことは、世襲女性神役のノロと根神では、その守護神が異なるということである。すなわち、ノロは、「ニライのお通しである火の神を守護神」としているのに対し、根神は、「祖霊を守護神<sup>42)</sup>」としているのである。このことは、久高島の祭祀行事では、ソールイガナシーが中心となる竜宮に関する行事と根人が司祭するテラーガミ以外のすべての村落レベルの行事をノロが司祭しているが、ノロは祖先神（滞在神）に関連する行事には本来無縁であり、根神が司祭するものであったことを想定させる<sup>43)</sup>。

したがって、久高島の祭祀集団は、来訪神＝ニライ＝ノロ＝年齢的に序列化された集団、滞在神＝ウタキ＝根神＝血縁関係に基づく集団という、二系列からなる集団を複合させたものであることを把握できる。

以上の議論を整理すれば表2のようになる<sup>44)</sup>。久高島の祭祀世界においては、滞在神、来訪神という神観念に基づくふたつのコンプレックスが存在している。

体系	所在	祭祀空間	祭祀行事	祭祀集団
滞在神	ウ タ キ	・クボーウタキ ・アグルダキ ・ユチンジャナムイ ・アンブシヤマ ・ウブンディヤマ ・フサァティムイ ・カンジャナヤマ ・アカララキ ・スベーラキ	・健康祈願 ・火事・水難除けの祈願	根神=血縁的關係に基づく集団
来訪神	ニ ラ イ 竜 宮	・伊敷浜 ・ユラウマヌ浜 ・カペールウタキ	・農耕儀礼 ・健康祈願 ・漁撈儀礼 ・健康祈願	ノロ(あるいはソールイガナシー)=年齢的に序列化された集団

表2 神観念に基づく対応

#### IV 日常生活と神観念

久高島における神観念は、祭祀行事などの非日常的な時空においてのみ、人々によって強く意識されているのではなく、日常生活のさまざまな局面にも深く関与している。

##### (1) 家屋配置と間取り

###### (i) 家屋配置

沖縄のシマにおいて、家屋配置の構造に一定の展開様式が存在していることは、従来の沖縄研究においてすでに指摘されている<sup>45)</sup>。

南向き斜面に立地することが多い沖縄のシマでは、聖域であるウタキ<sup>46)</sup>を頂点に、その南側に、シマの創世にあずかるとされる最高旧家(根所)をはじめとする本家群が位置し、さらにその南側に向かって分家群が位置している、という。

図6は、久高島における集落内の、根所を含む本家群の位置、および本分家関係の例を示したものである。(A, Fからの分家を示す)。

久高島では、集落の北側一帯が宅地に都合のよい平坦地であるにもかかわらず、北東-南西を軸とする斜面に沿って、分家群が本家の下向に展開している。

しかし、本家群の位置は、図をみる限りでは、必ずしも集落の上位に位置しているとは限らない。ところが、シマの人々によって古層とされる家々は、大里家、外間家のふたつの根所<sup>47)</sup>のほか、大西銘、並里（現在は屋敷跡のみ）、ウブンシミの各家であり、また他の本家とされる家は、他地域から転入してきた、という伝承を持つ<sup>48)</sup>など、家の成立が比較的新しいとされる家々なのである。

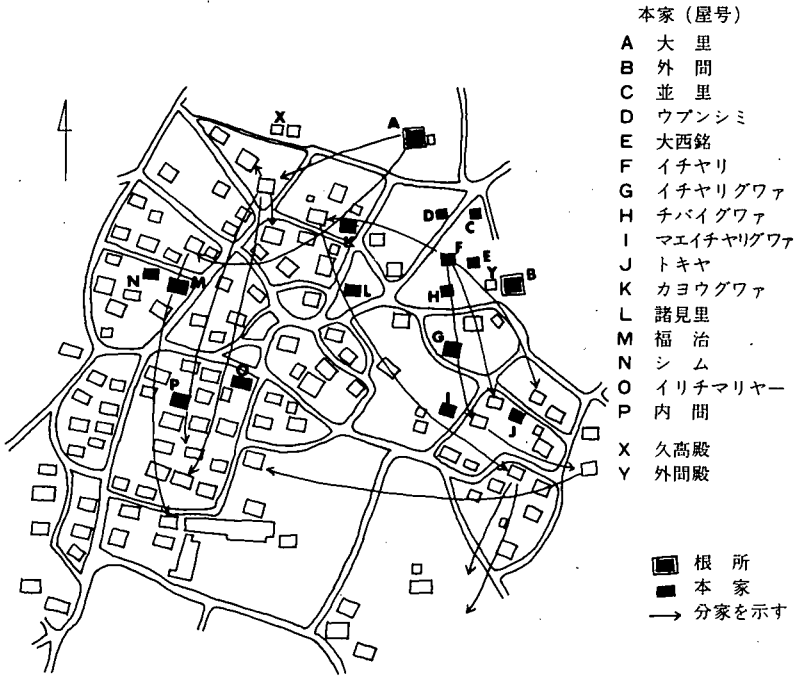


図6 本家分布および本分家関係

このことは、村落祭祀において重要な位置を占める世襲神役が古層とされる家々から出自していることから裏付けられる。

したがって、久高島では、古層の本家が集落の上位にあり、その後新参の本家を取り込みながら、集落が下方へと展開していったものと思われる。

さて、沖縄の一般的な展開様式と比較した場合、問題となるのは、久高島の家屋配置の要となっているのは、どこかという点である。

久高島では、集落の上位に位置している家は、「神に近い」家であると認識されており、神聖さに関して言えば、斜面の<上>/<下>に対して、<優>/<劣>という価値観が対応している。この方向性は、島内で最も神聖な場所<sup>49)</sup>であると認識されているクボーウタキを指向していると考えられる。久高島で、一般にウタキと言えばクボーウタキを指し、祭祀体系のなかでは、ウタキ群の中心的な役割を果している。

仲松<sup>50)</sup>は、沖縄において広く認められる家屋の展開様式を深層で規定しているのは、「オソイ（襲）」と「クサテ（腰当）」という思想<sup>51)</sup>である、としている。

「オソイ」とは、「親である神は、自己の子である村落民を常に愛し、これを護り育てている。」という観念であり、「クサテ」とは、「神のオソイに対して、神の子である村落民は自己の親である神に抱かれ、これに依り添う、すなわちクサテして生存、繁栄してゆく。」という観念である。仲松は、この思想が、「地的に表現」されたものが、家屋配置の構造である、とする。すなわち、ウタキの祖先神が斜面の上位の本家から下位の分家へと連なる家々を見守り、それらの家々がその

系譜をさかのぼり、ウタキの神に依り添っているという図式である。家屋配置の展開様式が、広く沖縄において一様であることには何らかの理由がある筈であり、仲松の説明は、沖縄において普遍性を持つものである、と考えられる。

久高島では、斜面の上位の家ほど「神に近い」のであり、集落内の家屋配置は、クボーウタキと集落を結ぶ軸に拘束されており、神観念（滞在神）に立却する説明は、ここでも妥当と思われる。

## (ii) 間取り

来訪神が去来するニライが、久高島では東方海上の遙か彼方であり、農耕儀礼において〈西〉／〈東〉に、〈-〉／〈+〉の価値観が対応していることはさきに述べた。このほかにも東西を軸とする価値観を間取りのなかにもみ出すことができる。

図7は、久高島の民家の間取りを模式的に描いたものである。裏座の有無、部屋の広さに違いこそあれ、ほぼこの間取りにしたがっている。この間取りの一様性について、島の人は「台所は東に向けては作れないからだ。<sup>52)</sup>」と説明する。

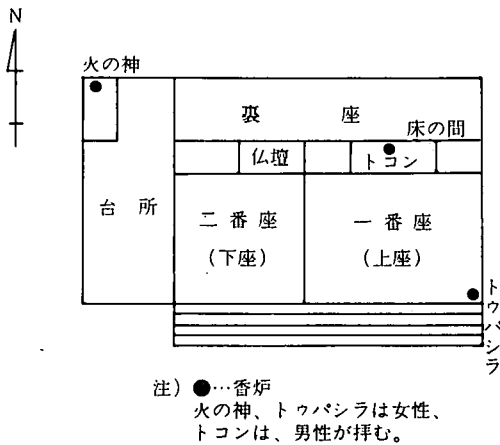


図7 民家の間取り

ところが、久高島の民家のなかで、外間殿の東に隣接している民家だけが、図6の間取りの東西を逆転させた逆構えの間取りになっている。

久高島の間取りは、祭祀場の隣りで逆転している点で祭祀世界との関連を、東西を軸としている点で来訪神信仰との関連を想定させる。

久高島では、北東=南西の軸と東=西の軸が、それぞれ家屋配置の展開様式と間取りの様式を拘束し、村落空間を構成している。これは、滞在神と来訪神というふたつの神観念の体系の、村落空間への投影にはかならない。

## (2) 土地制度<sup>53)</sup>

久高島における現在の土地制度を要約すれば、次のようになる。

- (a) 久高島の耕地は、島の人々の共有を原則としている。登記簿上も「字久高」の所有となっている。
- (b) 共有地はワク地（百姓地）と呼ばれ、ひと組15戸からなる10の組に分配されている。
- (c) 各組に分配されている耕地は、島内の各所に散在している（図8）。これは、集落から耕地までの遠近、耕地の地味などを考慮して、平等になるように配分されているためである。
- (d) 原則として、各組に分配されている耕地は、さらに一筆ごとに細長い短冊状に15等分され、各家に分配される。
- (e) しかし、各家に分配される耕地面積は必ずしも均等ではなく、女子の労働力に応じて違いがある。
- (f) ワク地を共有している組は、血縁集団でも、地縁集団でもない。また、組内部での「ユイ」その他の労力交換、共同作業は、ほとんどみられない。
- (g) ノロ地、根人地と呼ばれる私有地も存在している。ノロ、根人は、祭祀集団において、世襲

により継承される神役である。

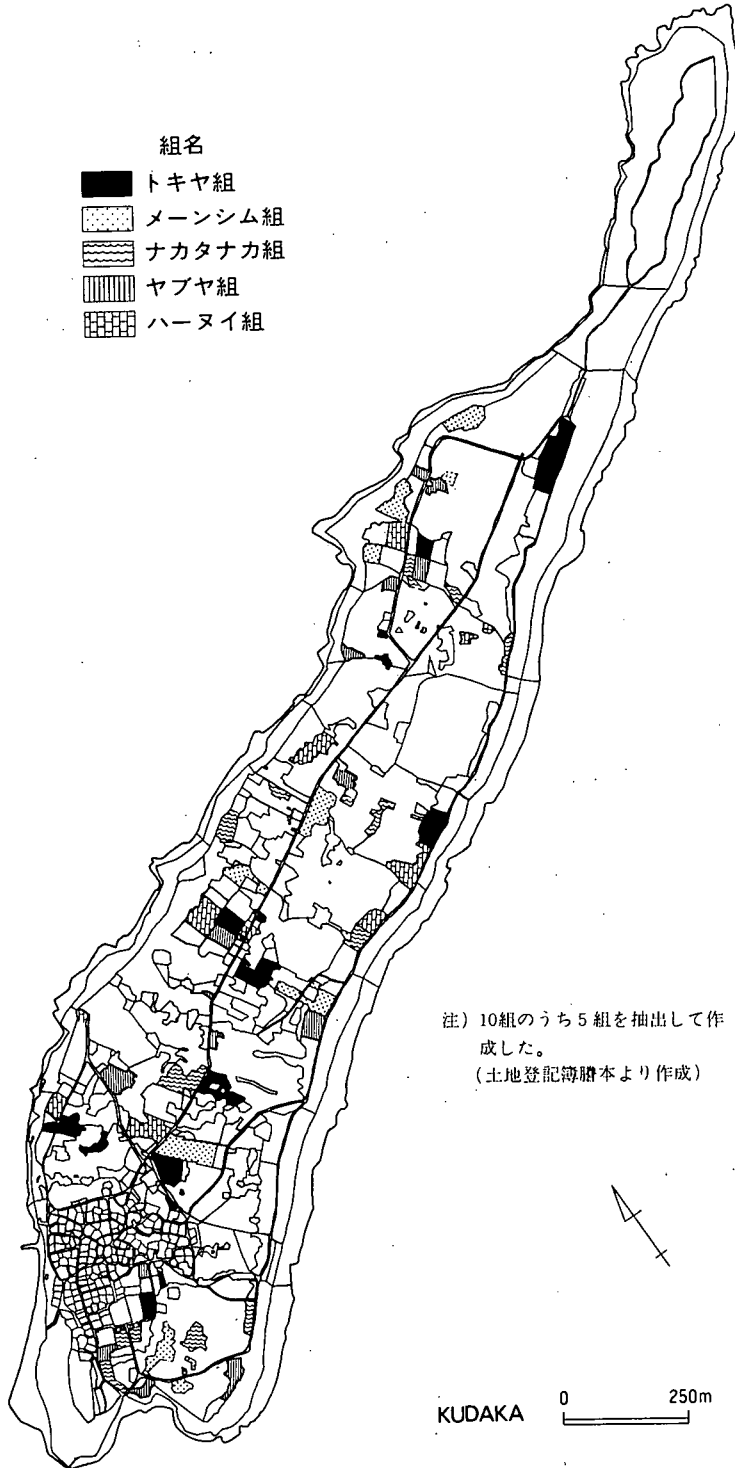


図8 久高島における組別耕地の分散状況

久高島の土地制度は、いくつかの点で祭祀世界、特に来訪神信仰を軸とするコムプレックスと関連を持っている。

第1に、農耕儀礼などのニライに関する行事の際には、神への供物は、土地制度の組を単位として醸出されている、ということである。

1月のソージマッティと5月のマブッチマッティにおいては、タルマミキ（麦で作る）とマブチ（麦、粟<sup>54</sup>で作る粥状のもの）、3月の三月ウマチーと6月の六月ウマチーにおいてはタルマミキとソーキンバイ（麦を臼でひいて炊いたもの）を供物にしているが、タルマミキは、それぞれの組の組頭たちが、組を構成している各家から一合ずつ集めた麦、米などの材料を用いて作ったものである。

また、4月のカンジャンシー<sup>55</sup>の際には、それぞれの家のショーニン<sup>56</sup>の数に応じ（ショーニン一人あたり一合）米を、各組の組頭が集め、さらにその米を持ち寄って、ひと組10戸からなるブーシンカと呼ばれる地縁の集団がカシキー（オニギリ）を作って、供物としている。

このように、土地制度の組は、生産の場では、労力交換あるいは共同作業を行う単位とはなっていないが、供物の醸出の単位として祭祀行事の一端を担っている。

第2に、土地制度における私有者と共有者の別が、来訪神信仰を支える祭祀集団と対応している、ということである。

土地制度においては、現在「家」が耕地の分配の単位となっているが、実際に、畑地を耕しているのは女性だけであり、また耕地の分配も女子の労働力に応じて違っていることなどから、土地制度にかかわっているのは、事実上女性だけ、ということになる。その点について、明治32年～36年にかけての沖縄県土地整理事業時における、次のような逸話が残されている<sup>57</sup>。

「先年土地整理があった時、沖縄人の祖先が初めて上陸したといふ、久高島で島中の男子が集会して、共有地を分配して私有にする決議をしたところが、後で島中の女子が集会して、神代以来の制度を変更するのはよくない、其の上土地は古来女が関係してきたもの故、男子が勝手に処分する道理はない、といって、男子の決議を取消させて、もとの通り共有にしたことがある。」（傍点筆者）

以上の点を考慮すれば、制度上私有を許されているのは、ノロと根人であり、他は徹底した平等観念に基づいた共有となっている、という構成は、来訪神信仰を支えるノロ＝年齢的に序列化された集団という構成と明らかに対応している。

久高島における土地制度は、単に耕地の割り替えに関する制度としての側面を持っているばかりではなく、祭祀世界にも深く関与している、と考えられる。

### V 結 語

これまでの議論を整理すれば、図9のようになる。

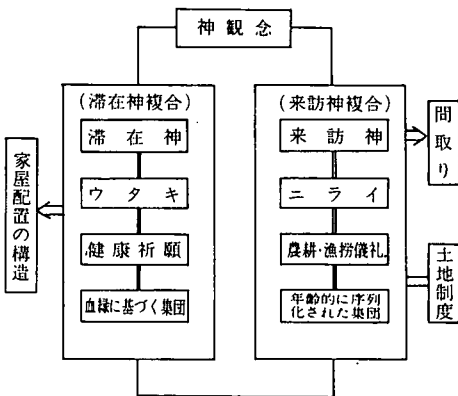


図9 久高島における「シマ」の内部体系

もいべきまとまりを持っている、と言える。

しかし、シマを構成している事象は無限であり、そういった意味では、あくまで一面的な整理の仕方であると言わなければならないが、それでもなお、琉球の世界が、いかに祭祀を中心に展開されているかが、把握できるように思われる。

注)

- 1) 沖繩の人々は、ひとつひとつの村落をこう呼んでいる。本土でいうムラに当たるものであろう。
- 2) 馬淵東一、村武精一らを中心とした一連の研究で、社会人類学の分野では「象徴主義的構造論」と呼ばれているものである。
- 3) 沖繩の固有信仰といってよい。
- 4) シマの小宇宙としての性格を直接的に論じてなくても、結果として、その一端が浮き彫りにされているものがある。たとえば、佐喜真興栄、『シマの話』、郷土研究社、1925。仲松弥秀、『神と村』 伝統と現代社、1975。など。
- 5) 小川徹「解説」(馬淵東一、小川徹編『沖繩文化論叢3』、平凡社、1971)、p. 28。
- 6) 本稿は、1978～1980年の数回にわたる調査によって得られた資料に基づいている。
- 7) 最高地点海拔 17.1 m 最長部 3.2 Km. 面積 1.38 km<sup>2</sup>
- 8) 1979年現在26隻のサバニがある。
- 9) 1戸あたり平均22アール。
- 10) 久高島では、耕地の共有制を基本としている。
- 11) 登記簿上の地目が、「畑」となっているうちの半分は、シャリンバイなどの雑木でおおわれている。
- 12) イザイホーは、30才に達した女性が 祭祀集団に加入する際の、加入礼としての性格を持っている。
- 13) これまで、イザイホーに関しては数多くの報告書が公にされている。たとえば、島越憲三郎、『琉球宗教史の研究』、角川書店、1965。  
桜井満、『イザイホーの意義』、南と北、40、p. 71～82。  
安泉松雄、『イザイホーの御祭』、国学院雑誌、68—12、p. 48～60。など。
- 14) これらふたつの神観念を、明瞭に対比させて考えたのは、J. Kreiner、「南西諸島における神観念、他界観の一考察」、沖繩民俗、5—3、4、1967、p. 11～26。が初めてである。
- 15) たとえば、アカマタ・クロマタ(西表島古見、新城島上地など)、マユンガナシ(石垣島川平)がある。
- 16) 14)に同じ。p. 16。
- 17) 以下ニライと総称。
- 18) たとえば、柳田国男「海神宮考」、民族学研究、15—2、1950、p. 92～107。
- 19) 14)に同じ。p. 16。
- 20) 仲松弥秀、『神と村』 p. 154、伝統と現代社、1975。
- 21) 20)に同じ。p. 154。
- 22) 14)に同じ。p. 19。
- 23) 一般的に言って、ひとつのマキで成立している村落には、ひとつのウタキのほかに、ひとつの、殿あるいは神アシャギと呼ばれる祭祀場が対応している。
- 24) たとえば、伊藤幹治、「奄美の神祭—加計呂麻島ノロ神事調査報告」、国学院大学日本文化研究所紀要、3、p. 53～139。にみられる、加計呂麻島瀬武の事例など。
- 25) 仲松弥秀、「琉球列島における村落の構造的性格」、人文地理、16—2、1964。  
仲松は、現集落付近に、拝地、特に拝井がないことにより、現集落は移動を経験した集落であるとした。さらに拝井が集落から離れて、アグルカー、ヤグルカーのふたつ存在し、またそれぞれの拝井のそばに貝塚および聖地(アグンハミ、ハタス)があることなどにより、現久高村落は、拝井・聖地付近にあったふたつの村落が、移動・併合することによって形成された、としている。
- 26) 諏訪哲郎・中俣均・吉成直樹、「久高島のイザイホーをめぐる」、地理、24—5・6、1979
- 27) 以下の議論においては、古代の葬処であったかどうかということよりも、人々によって祖先神が宿っていると認識されているということのほうが重要となる。
- 28) ムイ=森。
- 29) 雨乞いの際に祈願。
- 30) 港の守り神としての性格を持っている。
- 31) 祭祀行事の際、それぞれのウタキに行って祈願することを省略して、クボーウタキで祈願して代替してしまう場合がある。
- 32) 谷川健一、比嘉康夫、『神々の島』、p. 149、平凡社、1979。
- 33) ここでは、村落レベルの行事に限定する。
- 34) 筆者の調査によって得られた資料のほかに、次の報告書を参考にした。  
桜井満、『神の島の祭りイザイホーの研究』、雄山閣、1979 p.45—54  
谷川健一、比嘉康夫、『神々の島』、平凡社、1979。

- 琉球大学民俗研究クラブ、「久高島イザイホー祭りの研究」, 沖縄民俗 13, 1965, p. 25~30.
- 35) 座って唱われる神歌をウムイ(思い), 立って唱われる神歌をティルルという.
- 36) このうち, 竜宮の神に結びつくもの3種. いずれもソールイガナシーと呼ばれる男性神役(二年交代で選出)が主催する.
- 37) このほかに, シマの抜い清め, という内容を持つカンジャンナシー(4月, 9月)がある. この行事が, 再生の思想に最も深く結びついているように思われる.
- 38) このふたつの祭祀集団は, 地縁的に区分されている(図2参照). 祭祀行事においては, 祭祀集団ごとに分けて行事を行う場面もあるが, 普通は合同で行う.
- 39) たとえば,  
伊藤幹治, 「南西諸島における来世観の複合構造序説」; 国学院雑誌 65-2・3, 1964.  
比嘉政夫, 「琉球の祭祀と世界観をめぐる問題」, 社会人類学年報, 5, 1968, p. 1~7.  
村武精一, 「琉球奄美の社会人類学」, 『日本民族学の回顧と展望』, 日本民族学振興会, 1966, p. 194~218. など.
- 40) 根神の卜定による.
- 41) 同じ階梯内でも, 年齢によって厳しく序列化されている.
- 42) 桜井満, 『神の島の祭りイザイホー』, p. 221 雄山閣, 1979
- 43) このことは, 沖縄において, かつては, シマの祭祀行事の中心的な役割を果していたのは根神であり, ノロは, 後に, 琉球王朝によって置かれた公的な女性神職であったことを考え合わせれば納得がゆく.
- 44) ふたつの神観念の体系は, 家レベルの祭祀においても明瞭に読み取ることができる. すなわち, 滞在神に結びつくトウバシラ祭祀が一方にあり, 他方には来訪神に結びつく火の神祭祀がある.
- 45) 20) に同じ.
- 46) 祖先神の宿るウタキ.
- 47) 久高島で, シマの創世にあずかるとされるのは大里家である. 根所がふたつあるのは, 現集落がふたつのマキが併合して形成されたことに由来しているが, 大里家のみがシマの創世伝承を持つのは, マキ併合以降の伝承の一元化の結果であろう.
- 48) たとえば, マエイチャリグワ家(図6中I)は, イチャリグワ家と与那城から養子にきた子供が成人したのちに独立したという伝承を持つ. 屋号に, マエ(前)が付されているのも, そのことに由来する.
- 49) クボウウタキは, 祭祀行事以外立入禁止である. また, 男子禁制.
- 50) 20) に同じ.
- 51) この思想は, 古代沖縄の歌謡である「オモロ草紙」のなかに表現されているという.
- 52) 台所は, 不浄なものであるという観念がある.
- 53) 久高島の土地制度については,  
浮田典良, 「沖縄久高島の土地制度」, 史林, 45-1, 1962, p. 128-137.  
田村浩, 『琉球共産村落の研究』, 至言社, 1927, p. 212~218. に詳しい.  
ここでは, 議論の対象を, 土地制度と祭祀世界とのかかわりという点に限定する.
- 54) 現在では, 粟の代わりに米を用いている.
- 55) 九月のカンジャンナシーでは, みられない.
- 56) 16才以上の男子.
- 57) 伊波普猷, 『沖縄女性史』, p 253, 小沢書店, 1919.

(昭和58年7月18日受理)

(昭和58年12月5日発行)